

## 第108回 岡山外科学会

と き：平成元年1月28日（土）13時より

と ころ：岡山大学医学部図書館3階講堂

会 長：西 本 詮

（平成元年2月9日受稿）

### 1. 口唇顎口蓋裂患者のチームアプローチ

川崎医科大学形成外科	河 村 進	岡 博 昭	森 口 隆 彦
同 矯正歯科	佐 藤 康 守	中 川 皓 文	
同 耳鼻咽喉科	山 本 英 一		
同 小児科	片 岡 直 樹		
同 保健医療部	上 坂 智 子		
川崎病院言語治療室	森 寿 子		

わたしたちは、口唇顎口蓋裂患者の治療を6部門が協力して、0歳から成人にいたるまで、総合的に行っている。治療時期を4期に分け、

それぞれの時期での各部門の役割の概略をのべた。

### 2. 胸郭出口症候群 — 3手術症例の経験 —

岡山労災病院脳神経外科	坂 井 恭 治	篠 山 英 道	諸 岡 弘
	難 波 真 平		

われわれは胸郭出口症候群の3手術治療例を経験した。鎖骨上進入法による斜角筋切離術が1例、経腋窩進入法による第1肋骨切除術が2例であった。一般的には経腋窩法を選択するが、斜角筋の関与が強く示唆される症例には鎖骨上

法が有用と思われる。診断のスクリーニングには、Morleyテストと3 minutes elevated arm stress exercise test (Roosテスト)を重視している。

### 3. 高齢者の頸椎・頸髄損傷の検討

岡山労災病院整形外科	甲 康 成	島 田 公 雄	宗 友 和 生
	鶴 上 浩	難 波 賢	荻 野 真 一
	前 田 裕 章		

60歳より86歳、平均70歳の高齢者の頸椎・頸髄損傷、46例につき検討した。骨損傷を18例に認め、麻痺は42例に認めた。高齢者における本

損傷の特徴は麻痺は中心性タイプが17例と多数を占める。合併症として呼吸器の合併症と老人性痴呆に悩まされた。受傷機転として自転車走

行中の転倒，階段，あぜ道からの転倒，転落など軽微な原因が多い。したがって，老人に対す

る啓蒙と環境整備等による予防が肝要である。

#### 4. 二分脊椎に合併した tethered spinal cord の2症例

水島中央病院脳神経外科	秋岡達郎	伊藤隆彦
同 整形外科	井上周	
竜操整形外科	今井健	
旭東病院脳神経外科	土井章弘	

症例1 3歳女。生下時，右腰仙部脂肪腫，潜在性二分脊椎があり，右下肢麻痺，足の変形，排尿障害が進行した。MRIにて脂肪腫と一塊の神経終末・下位脊髄円錐がみられた。手術により硬膜内脂肪腫を部分摘出，untetheringした。

症例2 13歳女。生下時，腰部脊髄髄膜瘤の手術施行。両下肢麻痺，排尿障害があり，腰痛を訴える。MRIにて下位脊髄円錐がみられ，手術により untethering した。術後，腰痛，排尿障害が改善した。

#### 5. 下位頸椎 rotatory displacement の1例

岡山大学整形外科	木下篤	中原進之介	小西均
	井上徹		
川鉄水島病院整形外科	古川惣一郎		

下位頸椎の rotatory displacement は特徴的な X 線所見が以前からよく知られているにもかかわらず，その一方で見過ごしが多い。これは，下位頸椎は撮影困難なため診断上判定が難しく，加えて rotatory displacement の場合には A-P

および lateral view でその所見がわずかであるため，転位がはっきりしないことによる。今回 swimmer's view が有効であった unilateral facet fx. の1例を経験したので文献的考察を加えて報告した。

#### 6. 急速に麻痺の進行した胸髄硬膜外膿瘍の1例

総合病院岡山赤十字病院整形外科	永易大典	三宅完二	小野勝之
	那須正義	井上修一	板寺英一
	東原信七郎		

重症糖尿病に合併し，急速に麻痺の進行した胸髄硬膜外膿瘍の1例を報告した。

本症は，稀な疾患であるが，手術時期を逸すると，重篤な神経症状を残すのみでなく，致命的となる。それ故，早期診断，早期治療が重要

である。すなわち，稀ではあるが，急性麻痺を呈する疾患の一つとして念頭に置き，本症が疑われたならば，直ちに手術療法を考慮することが重要である。

#### 7. 過去5年間における上腕骨近位端骨折の手術症例

岡山済生会総合病院整形外科	高城康師	人見康満	定金卓爾
	橋詰博行	藤本裕	長谷川康裕
	内田陽一郎		

昭和59年から63年までの上腕骨近位端骨折手

術例は25例で，観血整復18例，人工骨頭置換術

7例であった。観血整復の成績は1例を除き良好であった。人工骨頭置換では4例が成績良好、残り3例が不良であった。不良例は、平均年齢66歳と比較的高齢で、手術までの期間が平均13.3

日と長いものが多かった。

人工骨頭置換は、症例を選べば積極的に行なえる手術法であると考えられる。

## 8. スポーツ外傷に伴った膝蓋骨の脱臼骨折の2例

岡山大学整形外科 田中雅人 松下具敬 守都義明  
井上 一

最近、若年者のスポーツ活動に伴ったいくつかの外傷が増加してきているが、この中でも膝関節のスポーツ外傷が注目されている。今回、スポーツ外傷に伴った若い女性の膝蓋骨の外側

への脱臼に伴う tangential fracture の2例を経験したので、その診断(特に軸射 X-P と関節鏡による)および手術法(その適応と術式の選択)について若干の考察を加えて報告した。

## 9. 骨粗鬆症を呈した Klinefelter 症候群の1症例

岡山市立市民病院整形外科 毛利隆広 渡辺唯志 平田常雄  
広岡孝彦 菊山真行

Klinefelter 症候群は、統発生骨粗鬆症を生じることが知られておりますが、多発骨折を生じた症例の報告は、調べ得た範囲ではありませんでした。

症例は46歳男性で、染色体検査により47-XXYであり本症候群と診断致しました。昭和62年12月8日より、1年以内に右大腿骨頸部骨折、右踵骨剥離骨折、第8第11胸椎、第2第4腰椎圧

迫骨折を認めました。

骨粗鬆症の程度は、Singh の分類で grade 2、慈恵医大式分類でⅢ度でした。又、ファントムを用いた第3腰椎の骨塩量は、 $\text{CaCO}_3$ に換算して63.77mg/cm<sup>2</sup>であり著明な低下を認めました。血液生化学検査では、カルシトニンの低下を認め、これが骨粗鬆症の一つの原因であることが示唆されました。

## 10. バセドウ病術後に低 Ca 血症対策に難渋した1例

岡山大学第二外科 浪花宏幸 白杵尚志 青景和英  
小松原正吉 寺本 滋

23歳女性のバセドウ病に対する亜全摘除術後に上皮小体機能低下による低 Ca 血症を来した。斯る症例に対しては生涯に亘る補充療法を必要とするが、安定した補充療法に至るに難渋することが多い。また安定しても経済的負担が

極めて大きい。術後性機能低下症を作らぬため、上皮小体を損傷せず、また下甲状腺動脈を損傷せぬ術式を考慮する必要がある。更に切除標本に上皮小体が付着した時は、筋肉移植も考慮すべきである。

## 11. 高カルシウム血症を呈した副甲状腺過形成の1例

岡山協立病院外科 渡辺泰彦 左古昌蔵 浪尾博志  
川西瑞哉

症例は75歳、女性、高血圧にて通院中 ALP 高値がきっかけとなり、血清 Ca、C-PTH 高値を

みとめ副甲状腺機能亢進症と診断した。シンチグラムにより左下上皮小体の腫大をみとめた。

手術により摘出された腫瘍は3.6×2.2×0.8cm大で、主細胞型過形成と診断された。また甲状腺

は慢性甲状腺炎を合併していた。術後、血清Ca、C-PTH、ALPは正常値に回復した。

## 12. 術中のアナフィラキシーショックの1例

岡山大学麻酔・蘇生科 武田 吉正 金居 義純 小林 尚日出

今回、われわれは、術中に輸血またはアピテンによるアナフィラキシーショックを呈した症例を経験した。本症例は低血圧の改善が非常に困難であった。全身麻酔中は麻酔薬自体に原因を求める傾向が強かったり、術中覆布のために

蕁麻疹などの初期所見を見落とし原因の究明に遅れを生じる可能性がある。全身麻酔中は呼吸、循環系の監視のみならず皮膚の観察も重要である。

## 13. 外傷性横隔膜ヘルニアの2治験例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 森田 一郎 藤原 巍 稲田 洋  
正木 久男 原 太久茂 勝村 達喜

31歳と19歳共に男性の外傷性横隔膜ヘルニアを経験した。前者は受傷後3年経過し、後者では1ヵ月経過して手術となった。本症は、受傷直後の急性期を過ぎれば、他の合併損傷のない

場合かなりの長期間慢性経過をとるものと考えられた。また、合併損傷を伴う率が極めて高い事に注意しなければならない。

## 14. 大動脈合併切除により手術しえた肺癌の4症例

岡山大学第二外科 青江 基 市場 晋吾 中田 昌男  
木田 孝志 青笹 徹 松浦 求樹  
前田 宏也 伊達 学 大森 浩介  
三宅 敬二郎 森山 重治 清水 信義  
寺本 滋

我々は最近4例の大動脈浸潤肺癌に大動脈全層合併切除を行ない、手術することができたので、若干の考察を加えて報告した。これまで、大動脈壁への浸潤は外膜に留まる例が多いと報告されている。そこで我々は、一時的バイパス

を造設した後、大動脈を管状に切除する方法を考案し、これを現在まで肺癌症例4例に施行した。このうち1例は術後3年の現在も生存中で、肺癌に対して大動脈合併切除術の適応は意味のあるものとする。

## 15. 大動脈弁人工弁置換術後、遠隔期腹部手術後に発生した血栓弁の1例

川崎医科大学胸部心臓血管外科 松岡 秀治 藤原 巍 野上 厚志  
山根 尚慶 福田 久也 吉田 浩  
土光 荘六 勝村 達喜

大動脈弁置換術(AVR)3年後の腹部手術後に抗凝薬療法が中断したため血栓弁の合併をみた症例を経験した。症例は68歳の男性でAVR3年後に開腹術を施行後、10日後に左心不全症

状を来しショック状態となった。来院時クリック音聴取不能、透視にて弁の可動性が悪かったため、血栓弁にて同日緊急手術となった。人工弁置換術後の遠隔期外科手術時には術後早期

より抗凝血療法を再開することが重要と思われる。

## 16. 過去1年間の虚血性心疾患に対する緊急手術の検討

国立岡山病院心臓血管外科	浦上 淳	谷崎 眞行	藤田 邦雄
	東 良平	野村 修一	白井 由行
	大住 省三	宇野 浩司	松森 秀之
	岸 淳彦	佐々木 澄治	

1988年は虚血性心疾患に対する手術は21例でそのうち7例が緊急手術であった。7例中1例は梗塞切除で他の6例は緊急CABGであった。このうち3例はPTCAにひき続いて緊急CABGを行った。うちわけは急性心筋梗塞1例、PTCA

トラブル2例であった。PTCAの不成功やトラブルに対しては、緊急CABGが唯一の救命手段であり、内科医、外科医、麻酔科医が協力して緊急手術体制を整備することが重要である。

## 17. HOCMの外科手術症例の検討

心臓病センター榊原病院心臓血管外科	曾根 良幸	畑 隆登	難波 宏文
	高田 茂美	抗ノ瀬 昌彦	谷口 堯

最近10年間に当院で経験した、外科的治療を要した閉塞性肥大型心筋症（HOCM）5例について、その術式及び術後経過につき検討した。心室中隔の異常筋切除に加えて僧帽弁置換を併

施した3例については良好な結果が得られたが、僧帽弁置換単独の2例については1例に左心室流出路に圧較差を残した。各症例毎の解剖学的所見に基づいた術式の選択が必要である。

## 18. 食道原発悪性黒色腫の1治験例

川崎医科大学消化器外科	藤森 恭孝	木元 正利	長野 秀樹
	牟礼 勉	延籐 浩	佐野 開三

症例は、53歳、女性。主訴は上腹部不快感。上部消化管造影、内視鏡検査で噴門部胃癌 Borrmann 1型の診断で開腹し、胃全摘術、3群リンパ節郭清術を施行した。主病変は、Eaの3.9×3.7×1.3cmの亜有茎性腫瘤で、組織学的深達度

mp、メラニン顆粒、junctional activityを認め、食道原発悪性黒色腫と診断した。術後3ヵ月現在再発の徴候を認めていない。過去10年間の本邦報告例を検討し、報告した。

## 19. 胸部食道腺癌の1症例

国立岡山病院外科	松森 秀之	岸 淳彦	浦上 淳
	宇野 浩司	大住 省三	白井 由行
	田中 信一郎	野村 修一	東 良平
	佐々木 澄治		

食道癌のうち腺癌は頻度の少ない癌であるが、最近われわれは、胃切除14年目に発症した胸部食道原発腺癌の1例を経験したので報告する。症例は患者79歳男性、主訴は嚥下困難。腫瘍は

Im — Eiに存在し、胸部食道切除術、横行結腸 — 下行結腸を用いた頸部食道 — 胃バイパス術を行った。病理組織所見にて腺癌と診断された。

## 20. 膿胸に合併した悪性リンパ腫の1例

岡山大学第二外科 市場 晋 吾 川崎 誠 治 梶谷 伸 顕  
清水 信義 寺本 滋

肺結核症に対する人工気胸術後、約40年経過し、慢性膿胸を併発した70歳の男性に肺剥皮術、膿胸嚢摘出術を施行した。膿胸嚢壁に悪性リン

パ腫を合併しており、その病理診断名は diffuse large cell type T cell lymphoma であった。

## 21. 膿胸手術症例の検討

岡山済生会総合病院外科 日下 敏 大原 利 憲 三好 和 也  
川畑 正 充 木村 秀 幸 片岡 和 男  
間野 清 志

昭和51年より昭和63年までに施行した膿胸手術症例22例をI群（無瘻性膿胸発症後1ヵ月以内手術群）・II群（無瘻性1ヵ月以降群）・III群（有瘻性群）に分類して検討した。I・II群は初回手術にて治癒可能であり、早期手術によるす

みやかな社会復帰を可能にするべきであると考えられた。III群は難治性で瘻孔・膿胸腔閉鎖のため新素材の使用、全身状態に応じた適切な手術々式の選択が考慮されるべきであると考えられた。

## 22. II c 早期胃癌と総胆管結石を合併した原発性消化管アミロイドーシスの1例

岡山労災病院外科 杉山 悟 間野 正 之 原田 英 樹  
石原 弘 道 津田 昭 次 古本 雅 彦

患者は、72歳男性。主訴は、全身倦怠感。消化管検査で、前庭部小彎のII c様病変、十二指腸下行脚から空腸のほぼ全域に隆起性病変を認めた。前者から腺癌、後者と直腸生検から原発性消化管アミロイドーシスと病理診断された。

さらに総胆管結石も合併しており、この症例に対して幽門側胃切除術、総胆管切開術を施行した。胃癌と消化管アミロイドーシスの合併例は、本症例を含み本邦で5例が報告されている。

## 23. 胃癌におけるNo. 16リンパ節郭清の意義

岡山大学第一外科 劔持 雅 一 合地 明 上川 康 明  
浜田 史 洋 湊本 定 儀 石井 博  
折田 薫 三

当教室における過去4年間、269例の胃癌手術例のうち、No. 16リンパ節に転移を認めた20例を検討した。C領域、Borr III、IV型にNo. 16転移例が多く、また、癌占拠部位と転移部位に差を認めた。1 cm未満のNo. 16リンパ節の転移

正診率は低く、5 mm未満の小さなリンパ節にも転移を認め、術前診断の困難性を伺わせる。そのため、S<sub>2</sub>、N<sub>2</sub>以上で転移頻度の高いと思われる症例は、積極的にNo. 16リンパ節郭清を行なう必要があると考える。

## 24. 胃癌術後胆石症の検討

岡山済生会総合病院外科	戸田 耕太郎	広瀬 周平	片岡 和男
	北村 元男	筒井 信正	大原 利憲
	木村 秀幸	三村 哲重	丸尾 幸喜
	川畑 正充	三好 和也	日下 敏
	木村 臣一	間野 清志	

昭和53年1月から昭和62年12月までの10年間に本院で手術を施行した24例の胃癌術後胆石症例について、同期間の胆石手術例、1,304例をcontrol群として臨床病理学的検討を行い、その成因について考察を加えた。胃癌術後胆石症で

はcontrol群に比して、胆嚢結石合併例を含めて、総胆管結石の比率が高く、結石の種類など石が多く、胆汁の有菌率が高かった。この事実は成因として胆汁うっ滞及び細菌感染が強く関与していることを示唆している。

## 25. 肝膿瘍破裂による汎発性腹膜炎の1例

岡山市民病院外科	岡部 和倫	浜田 英明	戸田 完治
	安原 正雄		

多発性肝膿瘍の死亡率は依然25～75%と高く、破裂した場合の予後は著しく不良となる。今回、多発性肝膿瘍破裂による汎発性腹膜炎に、グラム陰性桿菌敗血症と胸郭形成術後慢性呼吸不全

が合併した症例を経験した。肝膿瘍治療の3原則①感受性の良い抗生物質、②ドナレージ、③原因疾患に対する治療を施行したところ、術後66日目に軽快退院の運びとなった。

## 26. 膵嚢胞腺腫の1例

川崎医科大学消化器外科	柏田 順一郎	岩本 末治	清水 裕英
	笠井 裕	山本 康久	佐野 開三

今回我々は、術前診断し得た serous cystadenoma を経験したので報告する。

症例は、61歳女性、主訴は心窩部腫瘤でありその他症状は認めなかった。入院時、心窩部に小拳大の腫瘤を触知し、PEDにてわずかに低

下を認めた。術前CT、腹部超音波検査等の画像診断にて腫瘤は、特徴的像を示し膵体部に発生した serous cystadenoma と診断が可能であった。手術は、腫瘤を含め膵体尾部切除を行い術後経過は良好であった。

## 27. 肝動脈、門脈合併切除により治癒切除可能であった T<sub>2</sub>膵癌の1例

岡山大学第一外科	猶本 良夫	三村 久	柏野 博正
	津下 宏	合地 明	折田 薫三

肝動脈へ直接浸潤のあった症例に対し、肝動脈合併切除を行ない治癒切除可能となった。総肝動脈起始部より、左右肝動脈まで切除しY字型をした左大伏在静脈をgraftした。術後のDSAにても patency は良好であった。組織学的にも、

胃十二指腸動脈周囲の結合織への癌浸潤が確認され、肝動脈切除の意義が明らかであった。また、門脈も合併切除し、端々吻合したが、切除した門脈周囲には癌浸潤はなかった。絶対治癒切除術を施行し得た。

## 28. 超音波診断が手術適応の決定に有用であった腹膜炎の2症例

薬師寺慈恵病院 薬師寺 公一 薬師寺 信一 難波 康夫

急性腹症は、診断に迅速さと正確さを求められる疾患群で、最近のME機器の進歩がその診断に果たす役割は大きいと思われまふ。中でも超音波診断装置は、結果が出るまでの時間が早いこと、苦しがつている患者を移送する事なく

bed side で直ちに検査が可能であることなどから全例行なうべき検査といえます。最近当院で経験した atypical な症例を中心に超音波検査の有用性に付いて報告しました。

## 29. 大網裂孔ヘルニアの3例

川崎医科大学附属川崎病院外科 平山 美冬 月山 雅之 土持 茂之  
朝倉 孝弘 光野 正人 松井 俊行  
小山 昱甫

我々は、大網裂孔ヘルニアの3例を経験したので症例とともに報告した。症例1は35歳男性、主訴は上腹部痛、嘔吐。腹部単純写真で胃小弯側に鏡面像。超音波、CTで胃背部に腸管像を認めた。網のう裂孔ヘルニアの診断で手術を施行。

小腸整復と大網裂孔縫縮を行なった。症例2は51歳男性で裂孔切除。症例3は68歳男性で大網裂孔縫縮と腸切除を行なった。症例2, 3の術前診断は共に腸閉塞であった。

## 30. S状結腸ポリープと共存した空腸異所性膵の1例

光生病院外科 金澤 一典 佐能量 雄 宮崎 医津博  
梶谷 伸顕  
同 麻酔科 小林 収  
同 内科 高谷 泰正 谷合一 陽

迷入膵は胃十二指腸に好発し、術前には粘膜下腫瘍としてとらえられることが多く、良性悪性の鑑別がしばしば困難である。今回我々はS状結腸ポリープの術中に偶然発見された59歳男性の空腸迷入膵の1例を経験した。本症例は粘膜

下層から漿膜下層に及んでおり正常膵臓組織とほぼ同様の形態を呈するHeinrich I型であった。その臨床病理学的特徴について文献的考察を加え報告する。

## 31. 小腸悪性リンパ腫の経験

岡山赤十字病院外科 石崎 雅浩 佐藤 泰雄 大塚 康吉  
小野 監作 川上 俊爾 古谷 四郎  
辻 尚志 宇高 徹 総  
同 病理 国友 忠義

小腸悪性リンパ腫は、非常に診断が困難な疾患である。我々は、今回 aneurysmal, 及び多発性の ulcerative type の小腸悪性リンパ腫の2例を経験した。いずれも回腸末端に発生した large

cell type のものであった。胃、大腸疾患を否定された腹部愁訴のある患者、もしくは急性腹症、特に悪性リンパ腫として化学療法中の急性腹症などでは、小腸悪性リンパ腫の存在を念頭にお

いておくことが必要と思われる。

### 32. 陥凹型早期大腸癌の1例

おもと病院	岩本伸二	石賀信史	庄達夫
	石原清宏	酒井邦彦	岩藤真治
	山本泰久		
高松通信病院	藤井康宏		
松田病院	松田穆	金川泰一朗	

症例は57歳男性，自覚症状は認めず，肝障害で入院加療中に大腸内視鏡を施行され，陥凹性病変を発見された。内視鏡所見は，S状結腸に軽度隆起した病変を認め，中央に不整な陥凹を有

し，II a+II cと診断した。S状結腸部分切除術を施行した。切除標本では7×6mmのII a+II c型を呈し，病理組織型は高分化腺癌で，深達度はmであった。

### 33. 異時性多発性大腸癌の検討

倉敷中央病院外科 西澤文男 高三秀成

1977年10月より1988年10月までに経験した異時性大腸多発癌5例につき報告した。第一癌発生時の年齢は平均62.3歳，第二癌発生までの期間は平均3年9ヵ月であった。第一癌と第二癌は比較的離れた部位に存在することが多く，5

例中3例が併存ポリープを有した。組織学的には高分化腺癌が多かった。第二癌発見時5例中3例はすでに進行癌であり，第一癌術後のfollow upが重要と思われた。